〔曲　名〕Czardas

チャルダス（オリジナル譜）

〔曲　種〕

〔作曲者〕Vittorio Monti

ヴィットリオ　モンティ

〔編　曲〕Jiro Nakano

中野二郎

作者は 1868.1.6.ナポリに生まれ、1923.2.2.パリに逝いたヴァイオリン奏者で作曲家。
S.Pietro a Majella の音楽学校で、ヴァイオリンを Ferdinando 及び Salvatore Pinto に、作曲を Paolo Serrao に学んだ。
18 才でヴァイオリンのマエストロとして認められパリにパリに赴いた。
そこで更に著名なヴァイオリニスト Camillo Sivori から教えを受けて大成した。
そしてコンクールに入賞し、パリの Lamoureux の指揮する Concert Classique の第一ヴァイオリン奏者となり、此処に 3 年留まり、Paris-Concert 管弦楽団の指揮者となった。
また、パリではマンドリンの作曲と教授を始め、流行の波にのり、1910 年にはパリでモンティグループとして知られたマンドリニスト、ギタリスト、作曲家（Goldberg,Ch.Feret とその兄弟、詩人でギタリスト且つ制作家 Gela)とセミプロのマンドリン合奏団を組織、この公演によって、これらの美しさが知られるに到った。
非常に沢山の劇場作品（16）の他に歌とピアノ、ヴァイオリンとピアノ、大管弦楽のための二つの序曲、他に 40 のプレットロ楽器のための作品があると記録にはあるが、判明しているだけでも膨大なものである。
本曲チャルダスはマンドリンのために作曲され、世界的に知られるようになったということであるが、元々ヴァイオリンの出身であり、そのことはその侭（まま）信じ難いが、マンドリン楽隆盛の波にのって、マンドリン独奏者が好んで弾くので、著名にする一役を買ったようにも思われる。

本邦でも既に服部　正氏の編曲で、そのコピーを見たことがあるが、作者自身が合奏にしたものがあり、（表紙参照）第２マンドリンの動きに作者の意図があって生かすように努めた。
元来ソロ曲であるので、マンドリンオーケストラ伴奏のソロ曲としもよいし、奏者の技量が揃えば、複数になっても面白いかと思う。
ヴァイオリンでハーモニック音で奏される部分（二長調）はマンドリンのオクターブ・ハーモニックでは如何に巧みな技量を持ってしても少々無理で、むしろサウンドホール上で pp で奏される方がよいと私は思う。

1993 年　11 月　発行

マンドリン合奏曲集９集（JMU 版パート譜付）より

〈注　釈〉
従来このチャルダスはクラシックではあまりにも有名な曲で、マンドリン合奏曲としては服部正、鈴木静一その他の編者によって、古くから愛奏されてきたが、いずれもクラシックの譜面からの移植であった。
チャルダスのマンドリンオリジナル譜は永年本邦にて調査されたが、入ってないことが判り、今回のオリジナル譜の入手により、中野氏の手により初めて作者の原曲に最も近づいた編曲となっている。

石　田　記

Czarda s
Vittorio Monti(1868～1923)
チャルダス

ヴィットリオ・モンティ　作曲

作曲者モンティは 1886 年ナポリの音楽学校出身のヴァイオリン演奏家で作品も多い。
そして今世紀初めパリーに移住し、マントドリンと作曲の教授を始めマンドリン音楽隆盛の波に乗り、1910 年にはパリーでモンティ・グループと称して、よく知られたマンドリニスト、ギタリスト、作曲家(GoldbergeFeret 兄弟、詩人でギタリストの Gela)とセミプロのマンドリン合奏団を組織し、この公演によってこれらの楽器の美しさが知られるようになった。
このチャルダスはマンドリンの為に作曲せられたという説もあるが、偶々マンドリンに乗せて一層効果が挙がったということらしい。
チャルダスはハンガリーの民族舞曲で、本来はジプシーのもの。
情緒的な緩いラッソーと快速調のフリスカか交互に現れ、強いシンコペート・リズムが特徴。

追加資料
遺稿
中野二郎編著
「マンドリン　ロマンの薫り２集」より

Vittorio Monti に関してはその後石村氏の渡欧による現地調査で更に詳しいことがわかってきており、その再発見収集された作品中に第２チャルダスがあることがわかり、
石村氏の発行の曲集に掲載出版された。その解説を全文紹介しておきます。

以下第２チャルダス曲目解説より
－－
2 me Czardas
（チャルダス第二番）

Vittorio Monti

Rid. di Takayuki Ishimura

Notte d'amore! Mellodie (愛の夜)

ヴィットリオ・モンティは 1868 年 1 月 6 日ナポリに生まれ、1923 年 2 月 2 日パリで没した生地の S.Pietro a Majella 音楽院で F.Pinto、S.Pinto にヴァイオリン、P.Serrao に作曲を学び、
18 才でヴァイオリニストとしての資格を得た。
1886 年パリに移り、パガニーニの唯一の弟子として知られる 名ヴァイオリニスト Camillo Sivoli の元で、より高度で完成された技巧を修得することとなった。
そのままパリに定住した彼は、同市の"ラムリュー管弦楽団"のコンサートマスター、"パリ・コンサート管弦楽団"の指揮者を歴任、
1910 年にはパリの多くの著名なマンドリニスト、ギタリストを集 めてマンドリンオーケストラ"モンティ・グループ"を創設し、その演奏会は大きな反響を呼んだ。

その後モンティは全ての演奏活動を断念し、ヴァイオリン、マンドリン教授、特に作曲家としての活動に専念した。

作品は、多くのオペレッタ、歌曲があり、中でもパントマイム「ピエロの降誕祭」 は当時非常にポピュラーな作品となった。またマンドリン楽の為にも
教則本をはじめ、多くの作品をミラノの出版社 Ricordi を中心に発表した。モンティの作品といえば「チャルダス」 がヴァイオリンの為の名曲として一
般に広く知られているが、この曲が元来マンドリンの為のオリジナル曲であることは余り知られていない。残念ながら本邦にはオリジナルの楽譜が入って
いなかった為、今日までいろいろな作曲家によってヴァイオリン譜より編曲されてきたが、近年イタリアでオリジナル譜(マンドリン二部とギター、ピアノ)
が発見され、これをもとに中野二郎氏がマンドリンオーケストラに編曲されている。

本曲集で紹介する「チャルダス第二番」は 1909 年上記 Ricordi より出版された作品で、原曲は独奏ヴァイオリンと管絃楽。本邦ではもちろん海外でも、
本曲の存在は知る入が少ないのではないかと思われる程の珍しい作品である。「第一番」に比べてややまとまりが悪い作品ではあるが、情熱的なテーマ
と軽快なリズムには捨て難い味がある。

前述したとおりモンティのマンドリン曲はあまり本邦には入っておらず、また編成も小さい為、ほとんど知られていないが、作品数は 400 曲以上とも言
われ、その中にはこのまま忘れ去られてしまうにはあまりにも惜しい作品がある。

「愛の夜」は、そうした作品の一つで、その感傷的なメロディー、豊かなハーモニーは極めて美しい。原編成は「チャルダス」と同じくマンドリン二
部、ギター、ピアノであるが、その他にヴィオロンチェロとピアノの為の版がある。
本曲は副題に「四月一日」とあり意味が判然としないが、本曲の作曲には作者の個人的な体験が強く出たものである様に推察される。

---

in English

Vittorio Monti

His musical career and a discussion of his works

Vittorio Monti was born on January 6, 1868 in Naples, Italy and died on February 2, 1923 in Paris, France.

(June 22, 1922 assumed that he died is a mistake)

He studied violin in Italy under F.Pinto and S.Pinto and composition under P.Serrao at the S.Pietro a Majella Music Conservatory and received certification as a violinist at the age of 18.

In 1886 he moved to Paris and studied under Camillo Sivoli -- who was famous for having been the sole disciple of Paganini -- in order to Raise his ability to an even higher level.

He settled in Paris and served as the concert master of the Lamoureux Orchestra and Conductor of the Paris Concert orchestra.

He assembled a number of the well-known mandolinists and guitarists of Paris and formed "The Monti Group" mandolin orchestra which received wide acclaim.

Eventually he gave up performing and concentrated on his activities as professor of violin and mandolin and particularly on composing.

The body of his work contains numerous operettas and songs and among them the pantomime "Pierrot's Christmas" enjoyed great popularity at the time. His publications, mainly through the publisher Ricordi of Milano, include a mandolin instruction book.

Among Monti's composition, "Czardas" is very well known as a piece for violin, but is a little know fact that it was originally written for mandolin.

Unfortunately no original score of this has reached Japan so various mandolin composers have until now have transposed scores for mandolin based upon the violin score.

Recently, however, an original score for two mandolins,guitar and piano was discovered in Italy. so based on this Maestro Jiro Nakano has made an arrangement for mandolin orchestra.

It should be noted that there are both a "Czardas No.1 and a "Czardas No.2".
The best known of these is No.1.
"Czardas No.2" which was published by Ricordi in 1909, is a score for violin and orchestra and not mandolin.
Few people, not only in Japan, but internationally as well, are aware of the existence of this piece.

This version seems to be somewhat inferior to No.1, but with its passionate theme
and lively rhythm it cannot be casually ignored.

Few of Monti's mandolin compositions have found their way to Japan and, because they are written only for small ensembles they are very little known.

Mont's works number over 400, and among them are some it would have been a great shame to have lost.